

KONAN UNIVERSITY

ライフコースの多様化と子育て期の働き方（2006年度 公開シンポジウム報告 育てることの困難 - 家族・教育・仕事の今を考える）

著者	中里 英樹
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	8
ページ	8-17
発行年	2007-02-14
URL	http://doi.org/10.14990/00002596

ライフコースの多様化と 子育て期の働き方

中里 英樹

甲南大学文学部社会学科助教授。専門は家族社会学、家族史、歴史人口学。近世以降の現代までに焦点を当て、親子関係や夫と妻の役割など、現在の家族を取り巻く状況がつけられた歴史的なプロセスについて研究している。

中里と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。私自身、一番上の八歳から一番下の二歳半に至る三人の男の子がおりまして、子育て中です。一番目のときは汐見先生の『すくすく赤ちゃん』〔一九九二年四月〜一九九九年三月、NHK放送〕を見ながら育てた世代です。ベネッセの「たまごクラブ」〔ひよこクラブ〕では、親をとても元気にさせてくれるコメントをくださる方として、非常に感銘を受けながら読んでいました。会場にも、汐見先生の本をご覧になっている方がたくさんいらっしゃると思います。今日は同じ場に立っていると、思ってたところ、私が先にお話しすることになってしまいました。今は下の子が、言葉は通じませんが、とても動き回るようになって本当に目が離せない時期です。休みのときなど一日じゅう相手をしていると、私のほうが夜ぐったりしてしまいます。そうなるとう自分の声がコントロールで

きなくなつて、だんだん口調がきつくなるんですが……。そうしながらできるかぎり父親として子育てに参加しています。そういう私が日曜日に働いて、働き方について発表をしていていいのだろうかとも思います。大学の教員という一番調整がききやすい者が、人に「働き方」を説きながら、自分の調整ができないようでは困ると思つて、明日はなんとか家にいるようにしました。都合を聞かれて用事が入っていないとついつい「空いている」といつてしまつて、どんどん予定が埋まつてしまうことが多かったのですが、この日は休むと決めたら、なんとか一日空けることができるものなんだと実感しているところです。

ネットに見る母親たちの本音

今日の発表タイトルは「ライフコースの多様化と子育て期の働き方」ですが、これでは話が広すぎますので、少し限定させていただきます。「ライフコースの多様化」については女性の生き方が中心になります。それから、先ほど森先生が「育てる」という言葉は幅広い範囲のものであるとおっしゃいましたが、私の報告に関しては乳幼児期の子育てを中心に考えていきたいと思つています。

それを考えていくうえで、まず、データから背景となる事柄を読み解きます。私は「家族」を研究テーマにしています。数年前から「働き方」についてどうしても考える必要があると思ひ始めました。徐々にですが、さまざまな企業の情報を収集したり、インタビューに行ったり、企業が開催する

子育て関連のイベントに参加したりしています。まだ研究の途上ですので、本日は途中経過ということでご了承いただければと思います。

まず、「現代日本における子育ての困難」ということです。今、新聞を見ると、政府の少子化対策が出されたり、次世代育成支援対策推進法が施行されたりして、少子化対策は非常に大きく取り上げられるようになりました。少し前までは男女共同参画が言われていたのが、急に少子化対策が前面に出てきています。政策として出てくる内容は近いところもあるんですが、重点の置き方がかなり少子化の方に傾いてきたと感じています。

少子化、つまり「子どもが減った。大変だ。増やさないと」というトーンはよく聞こえるんですが、本当に子育ての困難ということに寄り添った発言なのかどうかは疑問に思うことも結構あります。私の周りで子育て支援の活動をやっている人たちが、企業などさまざまなところに支援の依頼に行ってもなかなか理解してもらえない。「なんで、お母さんが家について育てるのに支援しないといけないのか」という反応を受けることが多いと聞くことがあります。こちらにいらしている方は皆さん関心を持って、自分自身で子育ての経験をされている方が多いと思いますので、いまさらというところもあるかもしれませんが、無理やり奥さんに連れてこられたお父さんもしらっしゃるかもしれませんので、導入として情報源を見ておきたいと思います。

インターネットの子育て掲示板の一つをご紹介します。イ

ンターネットは人に言いづらい悩みを相談する場として、わりと大きな位置を占めてきているのではないかと感じています。私の一番上の子のときは、妻も子育てに慣れていなくて大変でした。インターネットにつながると思ってもらって、アップ接続ですし、接続をしている人たち自体が少数で、ホームページも今ほど充実していませんでした。まずパソコンを立ちあげ、それからジーコジーコ電話回線をつなぎ、ピーとつなぎ終わるまでに一、二分。途中で切れることもあって、なかなかホームページを見るところまでたどり着けない。子育てしながらパッと見るという環境ではありませんでした。それに比べると今は、外には出掛けていけなくても、インターネットの掲示板であれば他人とつながることが出来ます。私がいちいちのお話を伺ったお母さんたちでも、一番つらかった時期にインターネットの掲示板が大きな支えになったとおっしゃった人がいました。

ベネッセのサイト「ワイメンズパーク、<http://women.benesse.ne.jp/cos/index.html>」は女性限定の登録制です。「ベネッセ育児」で検索すると出ると思っています。私が女性と偽って入るわけにもいかないので、今日は「B a b o o ! J A P A N」<http://www.baboojapan.com/>を紹介します。こちらは公開型で、誰でもその内容を読み、誰でも書き込める掲示板で、頻繁に更新されています。内容には、「掲示板」「育児相談」「愚痴のゴミ箱」「はじめに討論」育児ノイローゼ・幼児虐待」などいろいろあります。それぞれをクリックして入ると書き込めるようになります。

これは、育児ノイローゼのコーナーです。例えばある日の夕方に書き込まれた「夜泣き」という悩みで、「夜中に二〜三回泣いて起きる。ひどいときは一時間おき」とあります。これに対して四時間後に一人、さらに二時間弱後に一人書き込みがあります。すぐのレスポンスではありませんが、何日間も放っておかれるわけではなくて、頻繁にいろいろな人がアドバイスを送っています。だいたい温かいアドバイスです。相談者に寄り添うような存在になるために、管理者がつくっているページのように、「正論を書かないください」という注意書きが書いてあるんですね。そのなかで、今日のテーマとも関わる象徴的なものを一つ拾ってみました。「何もしたくない」という投稿です。この一つの投稿に対していろいろな人が意見を寄せています。ちよつと長くなりますが、最初のご本人の投稿を見てみます。

子どもが二人います。はつきり言って、相手にしたくないのです。一人にしておいて欲しいのです。抱っこもしたくない。子ども達に近寄られても、すぐうるさいと言ってしまうし、泣き声があるとすぐイライラしてしまいます。

病気が熱でぐったりしていても静かで良いなあと思ってしまいます。心配は二の次です。夫たちが心配して大騒ぎしている様子を見て、普通の親（人）はこんなものなんだと気付くことが多いです。私は慈悲の心、思いやりの気持ち之余り無いようです。

特に下の子どもはいたずらばかりしています。一歳なのでそういう年頃みたいですが、毎日毎日いたずらばかりでろくな事をしません。何回言っても確信犯のようにやっています。嫌がらせでしょうか？

兄弟二人揃うとけんかや争いばかりで嫌になります。毎日怒鳴ってばかりで朝になるのが恐ろしいです。家事もまともにしていません。まったくやる気が起きないので。ぼーっとしているばかりで家事がはかどりません。毎日やる気も無くだらだらしているだけで本当に情けないです。子どもたちに拘束され、体力も無く、どうすればやる気がでてるのか誰か教えてください。どうすれば子ども達と向き合えるのか、どうすれば可愛いと思えるのか知りたいです。

怒鳴りたくて怒鳴るわけではないけれども、そうやってしまふ。これを、母性がなくなつたとか、愛情のない人だ、などは片づけられないと思います。子どもをかわいいと思いたいけれど、それがどうしてもこの状況でできないという悩みの相談です。興味深かったのは、ステップファミリーの父からのアドバイスです。自分が再婚して自分の子どもと相手の子どもを育てている人です。同じような心境になった方なら、半分笑えるのではないのでしょうか。

《コメント1》

妻も先日保育園の園長先生から「とにかく叱る前に、抱っこしてあげましょうね。そうすると子どもも落ち着きま

「すよ」って言われて、「抱っこする気になれないんじや、ほけー！」と話していました。（会場笑）

確かに一日ずつと子どもを見ていると、なんでこんな意地悪な気持ちになるんだろうと思うような心境になります。どうしても子どもを嫌な目で見てしまう、そういう気持ちをよく表している言葉だと思います。ほかにも自分の例を挙げている人がいます。

《コメント2》

思い切って実家で一週間預かってと頼んでみましたがやっぱり断られ、お説教されて帰ってきました。

《コメント3》

私は「口」が出ます。暴言の嵐です。少し前は「手」が出てました。さすがに最近はやめるようにしています。夫はがんばってくれています。でも、もともと許容量の少ない人だし、仕事も大変だしで、私自身があまり当てていません。

いろいろ見ていると、「夫を当てにしていない」という言葉が非常に多く出てきます。私も言われているかもしれないんですが、ここにもよく表れていると思います。

いろいろ寄せられるコメントに対して、本人が最後に返答していません。コメントの多くは、それほど特別なアドバイスではないと思いますが、一言一言に対して、「少し気分が違っ

てきたかもしれません」と書いています。「だんなさんが子どもを心配していたり、関わったりしているんじゃないですか」といったコメントに対しては、

夫は子ども達を預けるとなると、すぐ同居の義母に頼るので何だか面白くないですね。保育園、つて言うところ可愛そうだって騒ぐし：一回義母に頼らず朝から寝かし付けまでやってもらいたいですね。

これもどこかで聞いたことのある言葉で、うなずかれる方がたくさんいると思います。

主なアドバイスは「子どもから少し離れてみてはどうですか」という、当たり前といえば当たり前のものです。しかしそれが当たり前ではない方もいらっしゃると思います。以前に、尼崎市で意欲的な試みをやっている女性センター「トレビエ」の「子育てパワーアップセミナー」で、子育てについて講演をしたことがあります。子育て中の親を対象にした、託児もできるセミナーでしたが、そこで初めて子どもを預けるような人も来ていました。その講座で「あまり一人で抱え込まないでいい」と話したら、初めてそういうことに気づいたという方が結構いらしたんですね。その方たちは、今の時代であっても、専業主婦になっているからには、子どもを人に預けることはいけないことだと考えていることがよくわかりました。そのために困難を抱えて、こういった掲示板に書き込んでくるのだと思います。

ではここで少し大きな背景に目を向けたいと思います。統計的なデータによって、こういった困難の背景になり得る人口学的な変化、あるいはライフコースの変化を見ていきます。

人口が減れば子どもも減る

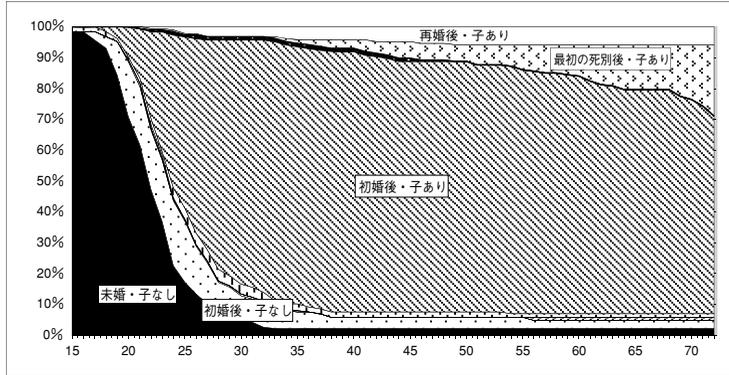
こちらをご覧ください(図1)。この図は女性の結婚と出産にかかわるライフコースについて、日本家族社会学会が大規模に行った調査(NFRS01)データです。全国で三千五百人ほどの女性に、結婚した時期や最初の子どもを産んだ時期などについてアンケート調査しています。私は調査の実施には関わっていませんが、この学会の会員ですのでデータを集計して使わせていただいています。サンプリング調査で、回答者が若干既婚者に偏っています。その辺はちょっと割り引いて考える必要があります。

三つの世代に分けて世代間の比較をしています。お手元の資料の中にグラフを並べてありますので、そちらのほうが分かりやすいと思います。縦がパーセント、横が年齢です。昭和(一九二五―二九年)生まれの女性が一五歳の時点では、ほとんど「未婚・子なし」です。しかし結婚は早く、二〇歳くらいになると「初婚後・子なし」が少し出てきます。そのあと大きく増えるのが「初婚後・子あり」です。三〇代ぐらいになると、ほとんどの人が結婚しています。子どものいない人も、一割には満たないまでも、そこそこいます。また「再婚後・子あり」「最初の死別後・子あり」という人たちもかなり出てきます。

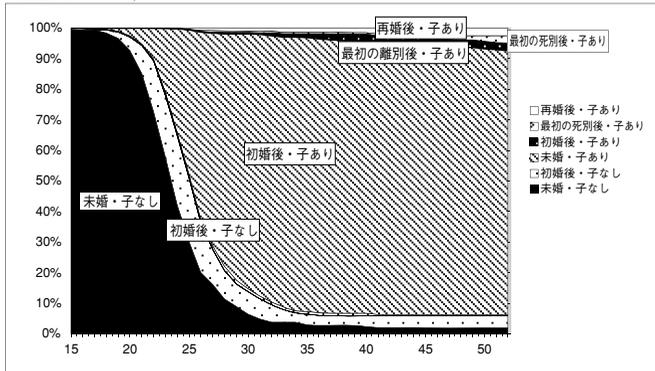
いわゆる団塊の世代を含む世代(一九四五―四九年)を見ますと、二〇歳を過ぎたあたりから急激に結婚する人が増えます。この頃は二五歳が結婚適齢期で、女性が「クリスマスケーキ」にたとえられたりしていましたが、二五歳で八割近くが結婚しています。「初婚後・子なし」の割合が一割以下で、子どもがいない時期が非常に短い点が目につきます。三〇代になると九割以上の人が結婚して子どもがいます。

これに対して一番新しい世代(一九六五―六九年)――私は一九六七年生まれの三八歳ですので、私の世代の女性たちです――この世代では、「未婚」も増えているし、「再婚後・子あり」も増えている。また「初婚後・子なし」もかなりいる。このデータを見比べると、団塊の世代を含む世代では「初婚後・子あり」が一気に増えていたのに対し、一番若い世代は非常に多様になっていることがわかります。ですから、二〇代半ばでの子育て経験者は非常に少数派と言ってもよく、少なくとも多数派ではない時代になっていると言えます。これは、一番新しい世代の人たちだけに關わる問題ではなくて、それ以前の人口学的な変化から、子育てをする人たちが少数派になる状況はある程度予測されます。いわゆる少子化という問題の前に、戦前から戦後にかけてベビーブームがありました。戦前から出生率が下がり始め、特に戦後、子どもは二人か三人持つものという画一化されたライフコース、家族イメージが強くなりました。それまでは子どもが四人も五人もいる人たちもめずらしくはない時代でしたが、戦後は非常に減っていった。団塊の世代の人たちは兄弟姉妹がたくさん

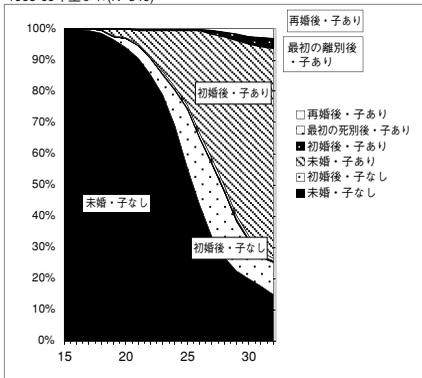
1925-29年生まれ (N=185)



49年生まれ (N=477)



1965-69年生まれ(N=346)



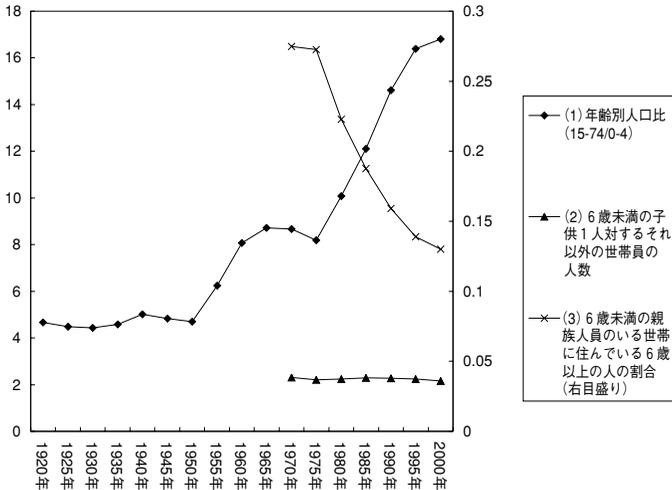
出典：中里（2005）
 原資料：NFRJ-S01
 凡例はすべてのコーホートで共通

図1 女性のライフコースにおける結婚・出産経験の変容

いる世代でしたが、一九六五―一九九九年生まれの人は、ほとんどが二〜三人兄弟です。ですから、現在、親になっている人たちの兄弟姉妹の数も、また同年齢の人も、団塊の世代に比べると少ない。その結果として、少子化という現象が起こってきます。

子どもが遠い存在に

次の図は見慣れないと思います(図2)。これは一九二〇年から二〇〇〇年までの出生率の変化を示したのですが、少子化の解消が困難と言われるので、ひねくれ者の私は逆の計算をしてみました。子ども(〇〜四歳)一人に対して、大人(二五〜七四歳)がどれだけいるか、その変化を見たのが――線です。子ども一人に対して大人は四人ぐらいだった時代から、一九五〇年からだんだん上がって八人になり、さらに一九七五年から急増します。そして現代は、四歳までの子どもに対して一六人の大人がいる時代になっています。そんなにとくさんの大人が見てくれるなら楽なはずなのに、なぜそんなに大変なのでしょう。下方に見える――線は、六歳未満の子ども一人に対して、世帯の中にどれだけ大人がいるかという数です。これはほとんど変わっていません。その結果として、――線は、六歳未満の親族人員のいる世帯に住んでいる六歳以上の人の割合です。世帯の中に小さい子どもがいることを日常的に経験している人がどれだけいるかが分かります。右の目盛りを見てください。一九七〇年代は〇・三(三〇%)なので、四人に一人ぐらいは自分の世帯に小



出典：中里 (2006)
 原資料：国勢調査

図2 子の出生半年後の父親の労働時間 (N=44168)

子どもがいるという経験をしていました。今では〇・一（一〇％）ぐらい、つまり九人に一人か八人に一人ぐらいです。これほど子どもが身近にいない状況になり、子育てをする人が非常に少数派になっていと言えます。

本当に女性は社会進出しているのか？

次の統計（図3）は、子育てをする人が少数派になっている状況での出産前後の母親の働き方です。これは最近よく使われている統計です。女性の社会進出が進んだと言われるとおり、確かに二〇代、三〇代あたりの女性の労働率は上がっています。しかし、それは未婚の女性、子どもがいない女性が増えていることが大きく影響しています。実際には、子どもを産んだ女性のうち、出産半年後で七五パーセント、すなわち四人に三人ぐらいは仕事をしていません。これに育児休業中の人を入れると、八〇数パーセントの母親が育児に専従していることになります。ここには女性の社会進出というイメージと全くそぐわない実態があります。ただでさえ少数派である子育て中の母が、職場からも遠のいているので、職場では子育て中の人が見えにくい状況になっています。

一方で男性を見てみますと（図4）、出生後半年の子どももつ父親のうち、週六〇時間働いている人が四人に一人はいます。週休二日だとすると、一日一二時間以上働いていることになります。私がお話を伺った事例でも、月に二〜四回ぐらいしか休みがなく、朝七時台に家を出て、夜中一二時、一時に帰宅という方がいました。会社にとって大事なことがあ

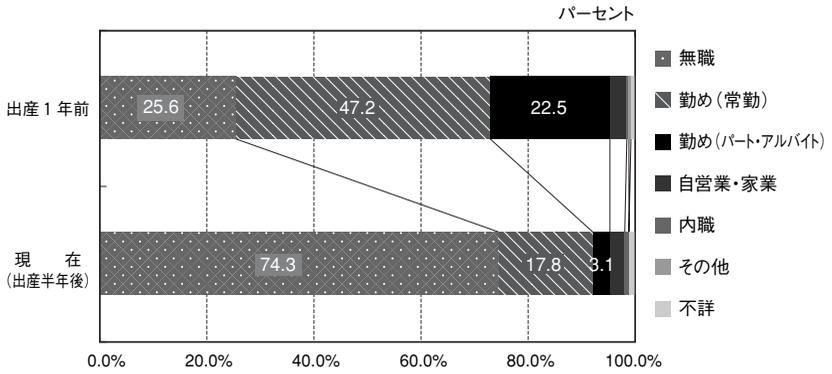
るとすぐ会議が行われたり、顧客のトラブルへの対応に追われたりして、なかなか家に帰れないそうです。

先ほどの掲示板でも「夫には頼らない」とありましたが、おむつも替えられない、子どもが何を要求しているか分からない、ということでは、なかなか夫に任せて外出するわけにはいかないようです。ある女性は、夫の仕事が忙しいのは分かっているのであまり負担をかけられないと思い、夫のいないところで泣いていることを打ち明けてくださいました。今は元気にされていますが、ある時期には子どもに対して自分のコントロールが効かなくなってしまうようもなくなった、という話をよく聞きました。

働き方の多様性を求めて

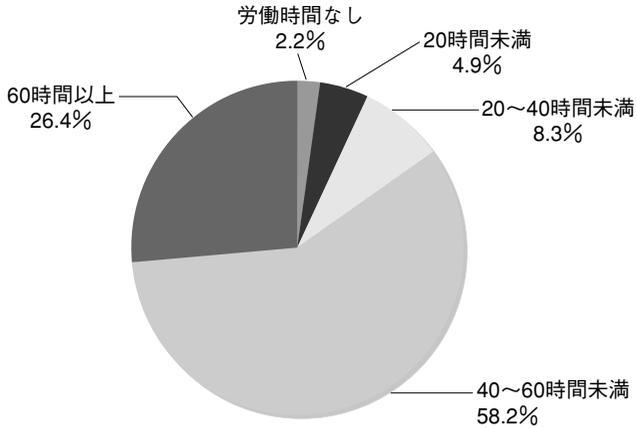
働き方の見直しに何が必要かということについて、制度の面ではいろいろなところで語られていますので、ここでは一つの点に絞ってみたいと思います。

ひとつ重要なのは、乳幼児を育てているのは少数派の人ですが、そういうケアをしなければならぬ人が存在しているという状況を目に見えるようにすることです。P&Gのダイバーシティプログラムを例として挙げましょう。これは就業日の一日を割いて行われる社内の人向けのイベントです。社長や人事のディレクターが、結婚や出産といった人生の転機を迎えることがいかに困難で、職場の人がどう配慮する必要があるか話したり、マーケティング・ディレクターが、子どもが生まれる前に働き方をどのように見直したかを語ったり



出典：厚生労働省（2003）より作成

図3 第1子出産前後の母親の就業状況 (N=22914)



出典：厚生労働省（2003）第38表より労働時間不詳を除いて算出・作図

図4 子の出生半年後の父親の労働時間 (N=44168)

しています。参加者は子育て中の人が多いですが、子育て中の人を部下に抱える人もいます。その後、分科会で介護の必要な家族を抱える人や子育て期の人に分かれて、社員の経験談が語られます。何時に子どもを預けに行つて、何時に引き取りに行くというような託児施設の使い方を含めた実践例を、新米ママ、第二子妊娠中、育児休業をとったお父さん、そういう人を部下に持つ管理職たちが他の社員に向かつて語り、どう対応するかを社員同士で議論し、問題と対応策を共有する試みをしています。

細かい制度はもちろんいろいろところで充実していますが、ここでのポイントは「誰にでも子育て期などの人生の大きな転機がある」という認識を共有して、職場で子育てを可視化するように、トップを含めて意識的な努力をすることです。子育て期の働き方、周りのサポートの仕方について言葉ではいろいろ言われていますが、そうした機会を意識的につくっていく必要があるのではないかと思います。駆け足になりましたが、これで私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【文献】

厚生労働省大臣官房統計情報部編、二〇〇三『第一回二十一世紀出生児縦断調査（平成十三年度）』財団法人厚生統計協会
中里英樹、二〇〇五「女性のライフコースに見る家族と世帯の変容——結婚・出産経験の画一化と多様化に注目して——」

『月刊自治研』vol.47, No.547, 49-55.

中里英樹、二〇〇六「少子化の「メリット」を子育てにどう活かすか——年少人口割合の減少と子育ての人口学的条件——」
『環』一六六号。

【謝辞】

シンポジウムでの報告内容を刊行するにあたって、「Babo o! Japan」管理人の「でんち」様には、ウェブ掲示板上に書き込みをされたご本人たちに呼びかけていただく労をおとりいただき、連絡のとれた方々には掲載についてご快諾をいただきました。また、P & Gの北尾真理子様（ダイバーシティ担当マネージャー）ならびに蒲生浩子様（エクスターナル・リレーションズ）には、インタビュ等にご協力いただいたことに加えて、内容についてご確認をいただき、掲載をご快諾いただきました。さまざま機会に子育て中の思いを直接お話しくださった方々の言葉も紹介させていただきます。多大なご協力をいただいた皆様にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。